

統計から社会の実情を読み取る

第20回 日本人の倫理的態度の特徴

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データはためになる!」(技術評論社、2012年) 等。



はじめに

世界数十か国の大学・研究機関の研究グループが参加し、共通の調査票で各国国民の意識を調べ相互に比較する「世界価値観調査」が5年ごとに行われている。各国ごとに、全国の18歳以上の男女1,000サンプル程度の回収を基本とした個人単位の意識調査である。現在、「世界価値観調査」サイトから結果が利用できる最新の2005年調査は2004～2008年に57か国で実施されている。

本号では、この調査の定番設問である倫理上の許容度に関する問い合わせ、すなわち、年金等無資格請求、キセル、脱税、ワイロといった不正行為、あるいは同性愛、売春、中絶、離婚、安楽死、自殺といった性倫理や生命倫理の上から問題となる行為に対して、各国の国民が、どの程度厳しく考えているか、あるいは、どの程度許容しているかに関する設問への回答結果から、日本人の倫理的態度の特徴について探ってみよう。

なお、設問文は、日本の調査票の表現に従っている。2005年調査には新たに「家庭内暴力」

の項目が加わったが、英語表現は“*For a man to beat his wife*”であり、国際的には「妻を叩く」に特定されている。

同性愛の許容度

まず、我が国でもかなり認められるようになつてきている同性愛に対する許容度について見てみよう(図1参照)。

「全く間違っている(認められない)」から「全く正しい(認める)」までの10段階評価から平均点を算出し、この結果をグラフ化した。これをみると、日本人は、同性愛に関して4.8点とほぼ中程度の許容度、順位では52か国中17位となっている(同性愛など特定の項目を調査していない国もあるので、国数は全参加国数より少ない)。

同性愛への許容度の最も高い国はスウェーデンであり、アンドラ、ノルウェー、スイス、オランダがこれに続いている。許容度が最も低い国はヨルダンであり、許容度1、すなわち、全員が1(全く間違っている)と回答している。

概して、許容度の高い順に、プロテスタント系

ヨーロッパ→カソリック系ヨーロッパ→中南米・アジア→イスラム圏となっているようである。米国は19位と日本を下回っており、それほど許容度が高くない。これは、保守的なキリスト教の影響およびヒスパニック系人口の影響であろう。

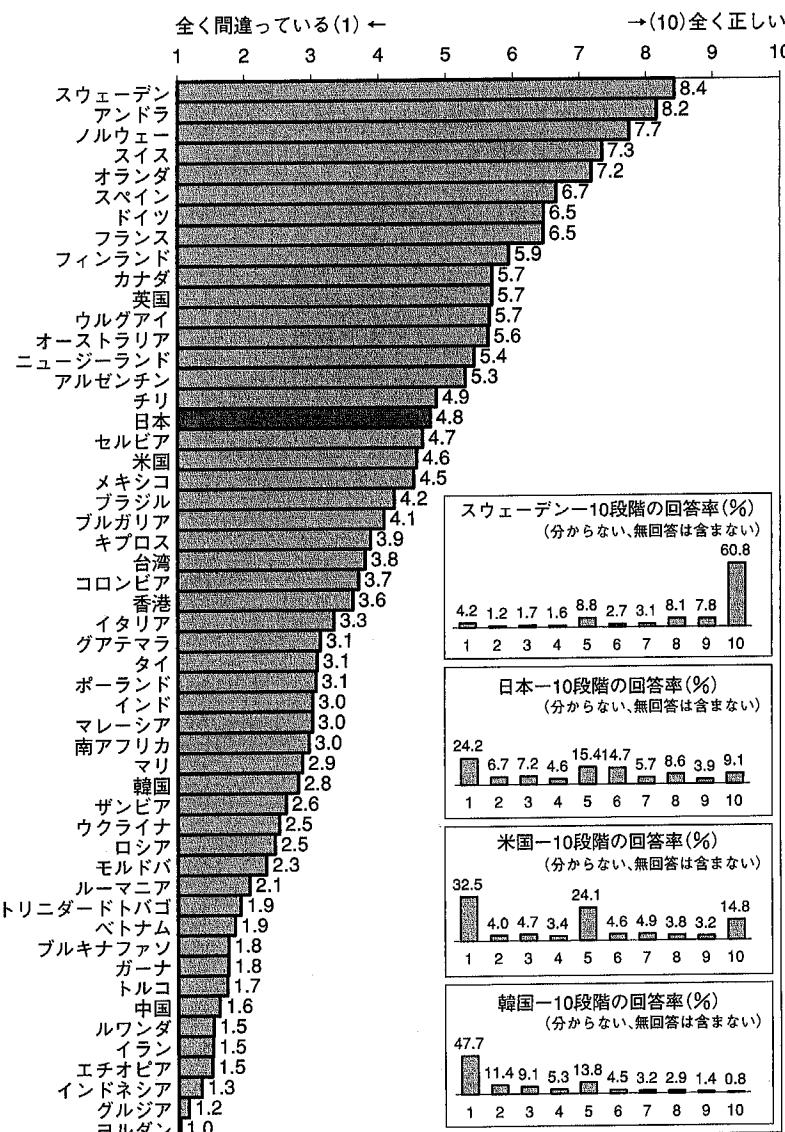
実際の回答分布を見てみると、スウェーデンでは、「全く正しい」(10)と答えた者が60.8%と6割を占めており、「全く間違っている」(1)は4.2%である。日本は、「全く間違っている」(1)が24.2%と最も多いが、「全く正しい」(10)も9.1%おり、5~6番と答えた者も結構いる。米国は、平均点では日本に近くなっているが、回答分布を見ると「全く間違っている」(1)と「全く正しい」(10)がそれぞれ32.5%、14.8%と両方も日本より多くなっており、国論が二分されている状況がうかがえる。韓国では、「全く間違っている」(1)が47.7%と半数近くおり、「全く正しい」(10)は0.8%とかなり少数派である。

倫理上の許容度の国による幅と日本の位置

図2は、同性愛の他、ワイロ、脱税といった不正がほぼ認知されている事項や安楽死、離婚、自殺など論議を呼んでいる事項などの全11設問について、許容度最小国と許容度最大国の幅を示している（日本の許容度は中間の縦線で示している）。

図2および表1に見るとおり、同性愛は最大国と最小国の許容度の幅が7.41と離婚や妊娠中絶

図1 同性愛許容度の国際比較（52か国、2005年頃）



注) 各国の全国成人男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果。「全く間違っている」(1)から「全く正しい」(10)までの10段階評価の平均点である。

資料) 世界価値観調査(World Values Survey) サイト(<http://www.worldvaluessurvey.org/>)

を上回って大きい。同性愛ほど、国によって見方が分かれている倫理項目はないといつてもよいのである。

日本の位置を見てみると、どの国でも当然よくないと思われている不正行為のA~Dについては、間違っていると答える人が多くなっている点が、まず、目立った特徴といえる。日本人は、世界の中でも、ルールを守る遵法精神の高い国民だといえよう。

表1 倫理上の許容度：国による幅と日本の位置（2005年頃）

	日本の許容度	最小許容国	許容度	最大許容国	許容度	最大と最小の幅
A 資格がないのに国の年金や医療給付などを要求	2.09	オランダ	1.50	セルビア	4.73	3.23
B 公共交通機関の料金をごまかす	1.58	日本	1.58	セルビア	4.50	2.92
C 脱税	1.46	ガーナ	1.00	セルビア	4.74	3.74
D 仕事に関連してワイロを受け取る	1.54	ヨルダン	1.13	セルビア	4.66	3.53
E 同性愛	4.77	ヨルダン	1.02	スウェーデン	8.43	7.41
F 売春	2.03	ヨルダン	1.01	アンドラ	5.61	4.59
G 妊娠中絶	4.59	ヨルダン	1.22	スウェーデン	7.85	6.63
H 離婚	6.45	イラク	1.65	アンドラ	8.72	7.06
I 安楽死	6.47	ヨルダン	1.24	アンドラ	7.35	6.11
J 自殺	2.88	ヨルダン	1.06	スイス	4.56	3.49
K 家庭内暴力	1.63	カナダ	1.16	マリ	4.82	3.65

注) 「全く間違っている」から「全く正しい」までの10段階評価の平均点を算出して各国比較。

資料) 図1と同じ

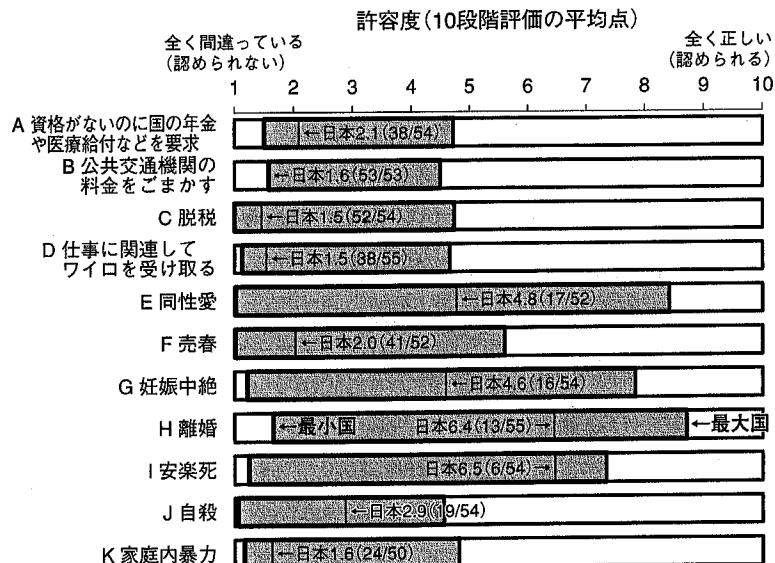
今年（2013年）のNHK大河ドラマ「八重の桜」は、主人公新島八重の精神的なよりどころとして、会津藩における幼年者の「什の掟」の最後の一節「ならぬことはならぬものです」を取り上げている。世界的に見ると、日本人は会津藩的なのである。

次に目立つのは、世界的に許容すべきかどうか意見が分かれるE～Kの項目について、「F 売春」、「K 家庭内暴力」を除いて、A～Dと異なり、日本人は全体としてどちらかというと許容度の高い部類に属する点である。許容度の高さのポジティブな面を寛容と呼ぶならば、日本人は先進国の国民ならではの寛容精神が見られるといつてもよい。

倫理的態度の国際比較

こうした日本人の倫理的許容度のパターンは、欧米諸国やアジア諸国と比較してどのように位置づけられるかを、最後に見ておこう。図3は、各項目の許容度の順位で各国を比較したグラフである。絶対的な許容度ではなく、図2における許

図2 倫理上の許容度：国による幅と日本の位置（2005年頃）



注) 日本の値に付されたカッコの中は、日本の順位と調査国数（特定の項目については、調査していない国もある）。

資料) 図1と同じ

容度の最大国と最小国との相対的な許容度を示している点に留意が必要である。

日本の2005年の順位について、許容度の小さい項目から大きい項目へと並べてみると、「B 公共交通機関の料金をごまかす」から「I 安楽死」まで、国際比較における日本の倫理的態度には大きな幅があることがうかがえる。

欧米のフランス、ドイツ、米国は、概して何れの項目も許容度が高く（「K 家庭内暴力」は例外）、

脱税、ワイロなどの不法行為まで含めて倫理的な寛容さ（悪くいえばいい加減さ）が特徴となっている。米国は、ドイツ、フランスと比較して許容度がやや小さいが、これは、上の同性愛の許容度の分析で見たように、キリスト教保守主義の影響によるものであろう。

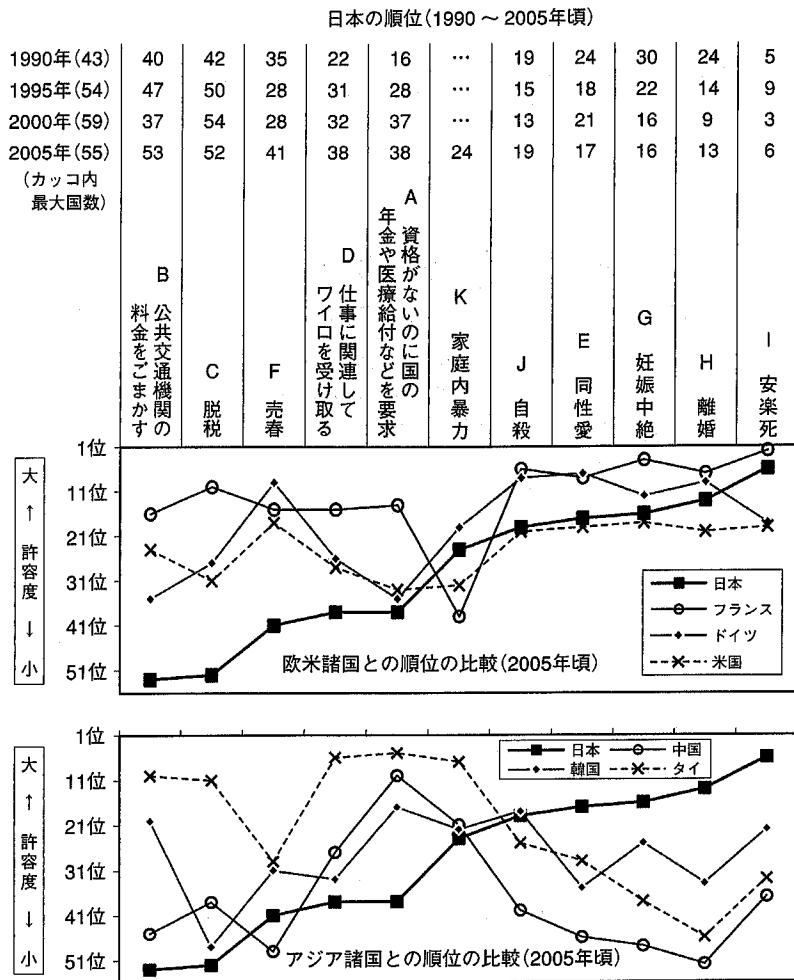
次に、アジア諸国は、不法行為については国によりバラツキが大きく、日本ほど「ダメなものはダメ」とはしていない。一方、「J自殺」、「E同性愛」、「G妊娠中絶」、「H離婚」、「I安楽死」の性倫理・生命倫理上の項目については概して許容度が低い点が目立っており、また、「K家庭内暴力」については、逆に許容度が大きくなっている。

結論として、欧米諸国やアジア諸国との比較における日本人の特徴としては、第1に、「不法行為に対して潔癖」、第2に、「性倫理、生命倫理の上からは許容度の低いアジア的価値観から許容度の大きい西歐的価値観に大きくシフト」という2点が挙げられよう。

さらに、第3の特徴として「日本人の独特的死生観」が指摘できる。

図3において、1990年頃からの日本の順位の変遷を見ると、日本の許容度が高い「J自殺」、「E同性愛」、「G妊娠中絶」、「H離婚」、「I安楽死」の5項目のうち、この間に許容度が高まった3項目（「E同性愛」、「G妊娠中絶」、「H離婚」）と元から許容度が高かった2項目（「J自殺」、「I安楽死」）は性格が異なることに気づかされる。「E同性愛」、「G妊娠中絶」、「H離婚」の許容度の高さは個人の自由や女性の権利を最大限認めようとする西歐

図3 倫理的態度の国際比較



注) 日本の順位の変遷については、毎回、比較対象の国数や構成国が変化している点に留意する必要がある。

資料) 図1と同じ

的倫理観の影響を考えることができる。1990年頃には、まだ日本は、これらに関して2005年頃のアジア諸国と同様の厳しい許容レベルにあったのである。一方、「J自殺」、「I安楽死」への許容度が元々高かった点には、仏教にもとづく無常観、自死を潔しとしていた伝統などの日本の文化的背景を想定せざるをえない。私の考えでは、死刑を廃止しないことを含めて、日本人が死に関連して許容度の大きい独特的見方を持っているということには、もっと自覚的であった方がよいと思っている。

* 「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録 2783 「同性愛許容度の国際比較」
- [2] 図録 2784 「自殺許容度の国際比較」